

娘の役目

野村胡堂

一

「八、何んか良い事があるのかい、たいそう嬉しそうじゃないか」「へッ、それほどでもありませんよ親分、今朝はほんの少しばかり寝起がいいだけで――」

ガラッ八の八五郎は、そういうながらも湧き上がってくる満悦まんえつを噛み殺すように、ニヤリニヤリと長んがい顎あごを撫で廻すのでした。

「叔母さんから纏まとまったお小遣でも貰った夢を見たんだろう」

「そんなケチなんじゃありませんよ、憚はばかりながら濡れ事の方で、へッ、へッ」

「朝っぱらから惚氣のろけの売り込みかい、道理で近頃は姿を見せないと思ったよ。ところで相手は誰だ、横町の師匠ししょうか、羅生門河岸らしやうもんがしの怪物かいぶつか、それとも煮売屋のお勘子か――」

平次はそんな事をいいながら朝の膳を押しやって、貧乏臭い粉煙草をさせるのでした。

「もう少し気のきいたところで――」

「大きく出やがったな、年中空っ尻のお前が入山形いりやまがたに二つ星の太夫と色事いろごとの出来るわけはねえ、それとも大名のお姫様のうんと物好きなのかな」

お静は、二人の話のトボケた調子に吹出しそうになって、あわててお勝手へ姿を隠しました。この上付き合っていると朝のうちから転げ廻るほど笑わされるのです。

「何を隠そう、ツイ其処——路地の入口の一件ですよ」

「あッ、お秀を張っているのか、悪いことはいわない、あれは止せ。第一お前には少しお職過ぎるぜ」

平次がこう言うのも無理のないことでした。

神田お台所町——銭形平次が年久しく住んでいる袋路地の入口に、今年の春あたり引越して来た仕立屋の駒吉、その娘のお秀の美しさは、神田中に知らぬ者も無かったのです。

尤も駒吉は三年前まで上野山下に大きな店を持って、東叡山の御出入りまで許された名誉の仕立屋でしたが、ツイ近所の伊勢屋幸右衛門に押入った大泥棒熊井熊五郎の召捕に、弥次馬の一人として飛出し、元気に任せて助勢したばかりに、巨盗熊五郎に斬られて右の腕を失い、それから健康が勝れない上に、仕事も上がったりで、とうとう山下の店を人手に譲って、お台所町のささやかなしもたやに越し、娘のお秀の賃仕事で、ほそぼそと暮している五十男だったのです。

お秀はその時二十歳、父親の怪我やら家の没落などで、その当時にしては嫁き遅れになりましたが、それが今では幸せになって、父親の介抱を一手に、甲斐甲斐しく賃仕事をして、大した不自由のない日を送っておりました。親孝行で気性者で、その癖滅法愛くるしいお秀が、何彼につけて近所の独り者の噂に上らない筈もあります。

「親分の前だが、これでも男の端くれですぜ。お職過ぎるは可哀想じゃありませんか」

「ほい、怒ったのか、——じゃまアお前とお秀は頃合の相手ということにして、何んかこう手応えでもあったのかい」

「手応えどころの段じゃない、ドーンと来ましたぜ」

ガラッ八の八五郎は乗り出すのです。

「ま、待ってくれ。そう弾はずみが付いちゃ叶かなわない——まず膝っ小僧を隠しなよ。鉄瓶てつびんは沸たぎっているんだぜ、そいつを引っくり返すと穏かじや済まない」

「そんな事は構やしませんよ。ね親分、お秀はこう言うんだ——私が斯こうして難儀しているのも、父ととさんが片輪になったのも、皆んな熊井熊五郎とかいう大泥棒のせいだから、私を可哀想だと思うなら、熊井熊五郎を縛っておくれ。八さんは十手捕縄を預っている立派な御用聞なんだから、それ位のことが出来ない筈はない。首尾しゅびよく父さんの仇が討てたら、その時は——」

「その時は何うしたというんだ」

「あとは袂たもとで顔を隠しましたよ、へッ、へッ、いわぬが花で——」

「馬鹿だなア、お秀のつもりじゃ、その時は他所よそへ嫁に行く——
といい度たかったのさ」

「そんな薄情なお秀じゃありませんよ、憚はばかりながら——」
八五郎は少しムキになります。

「まア宜い、三年前山下の伊勢屋で掛人かかりうどの浪人者を斬り殺し、隣の仕立屋駒吉に傷を負わせて逃げた熊井熊五郎が近頃また江戸に舞い戻って御府内を荒しているようだ。三年前は捕り損ねたが、今度という今度は逃がすこっちゃねエ、現に笹野ささのの旦那も、昨日お役所でお目にかかる、熊井熊五郎と言ったような筋の悪い曲者が御府内を荒し廻るのは、御上ごいこうの御威光にも拘かわることだ、何とか一日も早く召捕って、江戸中の町人どもに安心させるようにというお言葉だ。お秀坊の話が出なくても、俺はその事で今日は

あっちこっち飛廻ろうと思っている。ちやうど宜い塩梅だ、お前も精いっぱい手伝ってくれ」

平次の話はいよいよ真面目な軌道に乗って来ました。

「へエ、やりますよ。お秀坊の褒美付きだ、何んでも言いつけて下さい」

八五郎は夢中になってニジリ寄ります。

二

巨盗熊井熊五郎の活躍は、江戸中の手先御用聞を奮起させました。この曲者を首尾よく縛ることが出来れば、八五郎はお秀を手に入れるかも知れず、御用聞としては一世一代の誉れにもなるでしょう。

熊五郎が江戸を荒し始めたのは、かなり古いことで、元は上方から来たとも言い、甲州から入ったとも伝えますが、ともかく過去十年の間に、ざっと九十箇所も荒したことでしよう。一説に熊井熊五郎は日本国中の泥棒の大親分になるため、仲間の重立ったものと賭けをして、江戸の第一流中の一流という大町人、有徳の有名な、お役付の武家などを百人選び、百軒を全部荒して一万両を盗むという大願を立てたのだとさえ伝えられた程です。

ところが今から三年前、上野山下の呉服屋伊勢屋幸右衛門の家へ忍び込んで見露わされ、多勢の番頭手代に包囲された上、伊勢屋の居候浪人白井右京に土蔵裏に追い詰められましたが、熊五郎はあべこべにこれを斬り殺し、ちやうどそこへ駆けつけた、隣の仕立屋の主人駒吉の右の腕まで斬り落して逃げ亡せてから、ハタ

と消息を絶って、この春までは熊五郎のクの字の噂も聞かなかったのです。

それが、三年経った今年の夏あたりから、またもや江戸に舞い戻って、荒し残した大町人有名人の家を、虱つぶしに荒し始めたのでした。

父親の片腕を切られて、それから裏長屋に引込むほどに落ち果て、二十歳娘の手内職で父娘二人ほそぼそと暮しているお秀が、少し人間が甘口に出来た八五郎を捉まえて、愚痴交りに頼むのも無理のないことだったでしょう。

「親分、この十年のあいだに熊五郎が荒した場所と家の名をざつと調べて貰って来ましたよ。この通り」

翌る日、八五郎が八丁堀の組屋敷で調べた熊井熊五郎の犯跡を、半紙三枚ほどに書き連ねたのを持って来ました。

「どれどれ、十年前から始まって、足掛け三年前に伊勢屋へ入るまで八十二軒か、盗った金は三千二百両——思いのほか少ないな、あやめた人間は十七人、殺したのだけでも九人だ——フム」

平次は唸りました、これは全く捨ておき難い兇悪振りです。

「でも、十年前のは親分やあつしの知ったことじゃありませんよ」
「だが、この夏からもう七軒に押入っているぜ。町年寄の奈良屋市右衛門、朱座の淀屋甚太夫、銀座の小南利兵衛、油屋の大好庵、米屋の桑名屋、紙屋の西村、仏師の大内蔵——皆んな公儀御用の家ばかりだ」

「それに盗った金は四千五百両——先の九十軒より多いのは驚くでしょう。その代り今度は殺されたのも怪我人もねえ」

「それだけ熊五郎が巧者になったのさ、——おや、待ってくれ。熊

井熊五郎が押込みに入るのは、不思議に六の日が多いじゃないか、五月六日に二十六日、六月十六日、七月六日、二十六日、八月十六日、九月六日――」

「親分が休む日だ」

八五郎の発見は重大でした。岡っ引は休みがあるわけは無いのですが、それでも月に三度、六日と十六日二十六日だけは骨休みをして、好きな盆栽ぼんさいをいじったり、八五郎とザル碁ごを闘たたかわしている平次は、その日に限って熊井熊五郎が出勤することを知ったのは、単純な暗合や何んかで無いことは、あまりにも明あきらかです。

「明日は十月の六日だね、親分」

「フーム、ちょうど紅葉もみじでも見ながら王子の稲荷様いなりへお詣りしようと思ったが、これを見ちゃ休んでも居られめえ。朝のうちに八丁堀へ行つて、笹野の旦那と打ち合せ、昼から夜へかけて心当りの場所を廻って見るとしようか」

「心あたりというത്？」

「熊五郎の荒した家は、江戸で家元とか本家とかいう大町人の家ばかりだ。『江戸諸用細見図』という書物の中には、そんな大町人の名前がズラリと並んでいるよ。熊五郎がまだ荒さない家はいくらかもあるまいから、其処そこを一つ一つ見張らせるんだ」

「なるほどね」

今まで熊井熊五郎を追廻した老巧ろうこうの御用聞、三輪の万七も其処までは気が付かなかったのでしょう。

「それじゃ頼むぜ、八。明日の十月六日は大事だ、帰って一と休みするがいい」

「それじゃ親分」



©2018 萩 柚月

八五郎はフラリと外へ出ました。五日月はもう白々と中天に懸って、袋路地も鳩羽色^{はとば}にたそがれた中に、何やら艶めくもの――

「お秀じゃないか」

「あら、八さん」

「何をしているんだ」

「――」

「もう薄寒いぜ、若い女が一人で外にいる時刻じゃねえ」^{じこく}

「父さんは機嫌が悪いんですもの。身体が不自由だから無理もないけれど――」

お秀は可愛らしい顎^{あご}を襟^{えり}に埋めて、シクシク泣いているのです。「心配するなっただけよ、お前の父さんの仇^{かたき}はきつと取ってやるぜ、――そう言っただけじゃ安心が行くめえが、捕物にかけちゃ

江戸開府以来と言われた銭形の親分が、いよいよ乗出すことになったんだ」

「まア」

お秀の白い顔が、八五郎の顔へ近づくと、香ばしい息が八五郎の無精髯の頬を爽かに撫でるのでした。

「それによ、さすがは銭形の親分だ。この仕事に手を着けると決まると、たった一日でお前いろんな事が判ってしまったぜ」

「いろいろの事？」

「そいつはまア言わねえ方が宜かろう。とにかく明日からいよいよ熊五郎退治だ」

「嬉しいわねえ、それもこれも八さんのお蔭よ。父さんの仇が討てたら、私きつとお礼をするわ」

「なアーにそれに及ぶものか、悪者を縛るのがこちとらの稼業だ」
「でも私はお礼をしなきゃ心持が済まないもの、——それから、時々どんな様子か、そつと知らせて下さるわねエ」

「呑込んでいるよ」

八五郎はツイ、そう言いながらお秀の肩をポンと叩きました。処女はハツと驚いた様子で、八五郎の手を掻いくぐるようにバタバタと駆け出しましたが、自分の家の貧しい入口に立つと、間の悪そうに路地の外へ出て行く八五郎を見送って、淋しくやるせなくニツコリしました。

三

その晩、熊井熊五郎は、尾張様御呉服所、日本橋二丁目の茶屋

新四郎の奥へ押し入り有金八百兩を奪^{うば}い取った上、帰り際の邪魔をした、手代の甚三郎というのを斬りました。

熊五郎の活動をいつも六の日と鑑定^{かんてい}した銭形平次の智恵の裏を行って、その前の晩——十月五日の夜中を選んだ鋭^{するど}さは、さすがの平次も舌を卷きました。こんな恐ろしい人間が相手では、ガラッ八が褒美にありつくことなどは思いも寄りません。

二丁目の茶屋新四郎へ行ってみると、三輪^{みのわ}の万七が、子分のお神楽^{かぐら}の清吉をつれて早くも駆けつけ、血眼の調べの真っ最中でした。

「おや、三輪の兄哥。笹野の旦那の申し付けで、俺も覗きに來たが、相変らず熊五郎の手口だろうな」

平次は先輩^{せんぱい}の万七に対しては、いつでもこんな調子でした。

「銭形か、——こいつばかりは兄哥でもわかるめえよ。何処からどうして入ったか、まるっ切り見当も付かないんだ。戸締りに変りはないし、縁の下にも天窓^{てんまど}にも人間の潜^{もぐ}り込んだ跡はないんだぜ」

「仕事をして出たのは？」

「夜中にいきなり店番をしていた手代の甚三郎を叩き起し、雨戸を開けさせて悠々^{ゆうゆう}と出て行ったそうだ。覆面^{ふくめん}のまま懐手か何んかで顎で指図をするから、あんまり癪^{しゃく}にさわって、甚三郎が追っかけて庭まで出ると、——馬鹿奴っ、神妙に引込んで居れ——と振り返りざま一刀を浴びせた相だ。五日月が落ちた後だから、外は真っ暗で、家の中からは何んにも見えなかったというよ」

三輪の万七はそれでも一応の説明はしてくれれます。平次はいちおう主人の新四郎始め番頭手代たちにも逢って見ましたが、三輪

の万七が話してくれた外には何んの変ったこともありません。

手代の甚三郎の死体を見せて貰うと、傷は右の肩先から左へ、
——斜^{ななめ}袈^け掛^けに二三寸斬り下げておりますが、振り返り様抜き
討に斬ったにしては見事な腕前です。

「熊五郎が人をあやめたのは、今度は始めてだな」

「だから最初は熊五郎じゃ無いかも知れないと思ったが、入った場所のわからないところを見ると、やはり熊五郎の手口だ。他の泥棒ならどんなに巧^{うま}くやつても忍び込んだ場所が判るものだ、雨戸をコジあけるとか、格子^{こうし}を外^{はず}すとか、土台の下を掘るとか、窓わくに跡^{あと}を残すとか——熊五郎に限ってそれが一つもない」

「明るいうちに潜り込む術^てもありますぜ」

ガラッ八の八五郎は嘴^{くちばし}を容^いれました。

「暮れ六つには店を閉めて、多勢の奉公人が手分けをして掃^{そうじ}除^じをするんだぜ。顔を知らないのが一人でもマゴマゴして居りや、すぐ大騒ぎになるじゃないか」

お神楽の清吉が弾ね返すようにいいました。八五郎とはどうも
反^そりが合いません。

「八五郎兄哥の考えも一と理窟^{りくつ}だ。宵に忍び込んで夜中に仕事をする曲者もよくある例^{ため}しだが、熊井熊五郎が十年越し荒した跡を一つ一つ調べて見ると、そんな生優^{なまやさ}しいことじゃ無いのだよ。昔は熊五郎が仕事に入る家へ前以て何月何日参上すると、手紙で先触れした例もあるが、昼のうちから多勢の人に見張らせて、虫一匹入らないように用心しても、夜中にはチャンと入って来て、狙^{ねら}った品を盗って行くのだ。それを邪魔立てする者は、きつとやられた——そう言う相手だよ、八五郎兄哥の智恵でも、この謎^{なぞ}は

解けめえ」

三輪の万七はそう言って冷たい笑いを頬に漂ただよわせるのです。八五郎がどんなに口惜くやしがっても、昔の事を知らないだけに齒が立ちません。

しかし三輪の万七も何時までもガラッ八をからかっている気はありませんでした。熊井熊五郎という稀き代の兇族を相手にしては、十年間の経験でも自分一人だけでは覚束おぼつかなく、やはり銭形平次の智恵と力を借りるほかは無いかとはあまりにもよく解っているのです。

その日のうちに、江戸中の浪人者で、背の低い、腕の達者な、中年過ぎの、生活の贅ぜい沢たくな、身性のはつきりしない者は、町方の手で一人残らず調べ上げられ、昨夜の十月五日に家を開けたものは言う迄もなく、近頃六の日に行動の怪しかった者は念入りな詮議を受けました。

鍋町に住んでいる手習師匠ぼうの某、お玉ガ池の用心棒で評判のよくない某、入谷の浪宅に燻くすぶっている押借おしがりの常習犯で某と、十人ばかりの札付の浪人者が、町方の手で挙げられましたが、いずれも確かな現場ア不在証明リがあつて、この虱潰しらみつぶし案も失敗に終りました。

四

「あら、八さん」

「お秀か、まだお前に喜んで貰うような話はないよ」

「そんなことじゃないわ——あの、私にもお手伝の出来ることは

ありませんかしら」

今日もほの暗い路地の中に八五郎の帰りを迎えて、お秀は極悪そうに斯^こういうのです。父親の駒吉に似た小柄ですが、愛嬌^{あいきょう}があつてキビキビして、すぐれた気性を内に包みながら、何んか斯^すう透き通るような清らかさと、沁み出すような魅力^{みりよく}を感じさせる娘でした。

「そいつは無理だ、大の男でさえ命がけの仕事だもの。お秀さんのような綺麗な人が出る幕じゃねえ」

ガラッ八の八五郎は、少しムキになって、八つ手の葉っぱのような大きな掌^てを振ります。

「でも、父さんがそりゃ氣をもんで、ろくに身動きも出来ないくせに、ときどき飛出そうとするんですもの」

「銭形の親分が乗出しているんだ、もう一度熊五郎が動き出しゃ、間違ひなく縛られるよ。安心して待っているように、とそういつてくれ」

「有難う、八さん」

お秀はそういつて、あわてたように自分の家に入りました。まごまごしているとまた八五郎に肩位は叩かれるかも知れないのです。

八五郎はこれだけ請^うけ合つたに拘^かわらず、熊五郎の跳梁^{ちやうりやう}は次第に激しくなりました。

「さア、大変だ、親分」

八五郎が飛込んで来たのはそれから十日経つた十月十七日の朝でした。

「熊五郎が何処かへ入つたのだろう」

昨日の十六日は精いっぱいの用心をして、夜遅くなつて帰った平次は、今朝はもう不安な予感にさいなまれて、薄暗いうちから起き出して、八五郎の来るのを待っていたのです。

「小川町の御旗本、千二百石取の篠塚金之助様しのづかのお屋敷に入り、五百両の金を取って大玄関を開けて逃げ出しましたよ」

「篠塚金之助——それはお前、三年前に熊五郎が一度忍び込んだお屋敷じゃないか」

「あの時は首尾よく忍び込んだが、用人に見付けられて騒ぎ出され。御主人金之助様に追われて、熊五郎ほどの者も這々の体で逃げ出しましたよ。金之助様は一刀流の達人だ」

「そんな事もあったな」

「こんどはその仕返しに入つたんでしょう。ふてえ奴じゃありませんか」

「ともかく行って見よう」

平次は手早く支度をする、八五郎を促しうなが立てるように小川町に向いました。

篠塚金之助というのは、有福で聞えた大旗本で、屋敷も小川町の一角を占め、小さな大名ほどの暮し向に見えます。平次と八五郎は裏口から恐る恐る入って行って、用人に逢つて一応調べさして貰うつもりでしたが、町方の者というとまるで相手にしてくれません。

「それぞれ御支配のあることだから、当屋敷の出来事は、お係りの方へ届出る。気の毒だが町方役人は引取って貰いたい」

という挨拶。旗本の取締とりしまりは若年寄の役目で、町方の岡っ引などはまるっ切り齒が立たなかつたのです。

「わけのわからねえ唐変木とうへんぼくじゃないか、泥棒を捜し出して、あわよくば盗まれた金を取り戻してやろうというのに――」

八五郎は屋敷の外へ出ると、道の小石を蹴け飛ばしたり、羽目板を叩いたり、立った腹のやり場に困る様子ですが、

「怒るなよ八、千二百石取の大旗本じゃ齒が立たねえ」

平次はなだめなだめ帰るのです。

「ヘッ、三輪の親分とお神楽の清吉も神妙な顔をして裏口から入って行きますぜ。同じ剣突けんつくを食わされるんだろう、――宜い気味だ」

「馬鹿野郎、そんな事を言う奴があるものか、十手の誼よしみだ、ちよいと気をつけてやるが宜い」

平次は八五郎を走らせて一応注意させましたが、手柄争いに夢中になっている万七と清吉は、それをどう解釈したか、体よく、八五郎の注意を断って、篠塚の屋敷へ入ってしまいました。

「チェッ、親分の気も知らねえで、勝手に恥はじを掻きやがれ」

八五郎の膨ふくれること。

これを一挿話そうわにして、熊井熊五郎はいよいよ最後の飛躍を企くわてたのです。それから八日目の十月二十五日に、銭形平次の家に斯こんな手紙が投げ込まれました。

明十月二十六日、上野山下の伊勢屋幸右衛門の家に押入り、千両の金を無心するつもりだ。これで熊井熊五郎の百軒から一万両盗む大願じょうしゅは成就する。伊勢屋幸右衛門へは三年前に一度押入り、居候浪人白井某と隣の仕立屋駒吉を斬ったが、此方も縮尻しくじって一文も申受けなかった。今度はその埋め合せに、千両の金を申受ける。夢々疑うこと勿なれ。あなかしこ

平次どの

熊井熊五郎

と世にも人をなめた文句です。

「畜生ッ、人を馬鹿にしやがる」

八五郎は躍起となつていきり立ちますが、

「待て待て飛出す前によく考えることだ。これだけの事を前以つて知らせるのは、容易ならぬことだ」

平次はジッと腕を組んで考え込みました。

五

「八、お秀の家へ行つて見ようと思うが、お前も行くか」

「へエ——？」

「三年前伊勢屋へ熊五郎が入った時の様子や、駒吉が斬られた時の事を詳しく訊きたいんだ」

「行きましょう、親分」

ガラッ八は大乗氣でした。

路地の入口、ささやかなしもた屋に駒吉を訪ねると、床を敷きつ放しの二階に通して、お秀にお茶などを入れさせながら、いろいろ話してくれました。駒吉というのは、まだ五十そこそこでしようが、怪我をしてから滅切り年を取つて、半分は寝ているらしく、見たところ六十近いような、一と握りほどの中老年人です。

「右腕は熊五郎に斬られて、この通り付け根からありませんから、ろくに身の廻りのことも出来ません。身に覚えた仕立てなどは、片手業でできる筈もなく、伊勢屋さんのお情けで少しばかり仕事を廻して貰い、娘が夜の目も寝ずに働いて、やっと二人口を過し

ております。それもこれも熊五郎の仕業で――」

駒吉はいろいろと立ち働くお秀の後ろ姿を眼で追いながら腑^ふ甲^が斐^いなくも涙組むのです。

三年前までは山下で良く暮していたので、昔の倂^{おもかげ}を忍ぶ調度はいくらか残っておりますが、その日の暮しに追われるらしい様子で、その辺の道具も着物もひどく不調和です。お秀はさすがに娘盛りで、赤い可愛らしいものを身に着けておりますが、それも何となくチグハグで哀れ深い姿でした。

いろいろ慰^{なぐさ}めて、二人は起ち上がりました。八五郎を一足先へやって、駒吉に何んか言い残した事を話していた平次は、階子段の入口と間違えて、いきなり押入の唐紙^{からかみ}を開けましたが、

「あつ、これは飛んだ事をした」

あわてて閉めて、階子段を降りて行きました。下では八五郎がお秀をつかまえて、何やらしんみり話し込んでおります。多分こんなヘマでもやって、少しでも二階で手間取り、八五郎とお秀が差向いで話をする時間を、少しでも多く作ってやろうという親切だったかも知れません。

六

その晩から翌る日にかけて、上野山下の伊勢屋の騒ぎは大変でした。三戸前の土蔵のうち、一番小さくて嚴重な土蔵に、何万両とも知れぬ現金を入れた上、大切な道具類、諸大名から預った反物などをことごとく詰めこみ、翌る二十六日の夕刻には、嚴重に錠^{じようまえ}前をおろして、番頭と手代と出入りの鳶^{とび}の者職人衆などが、交

代で張り番をすることになりました。

三輪の万七とお神楽かぐらの清吉は、早くから来て頑張り、出入りをやかましくいいましたが、何分多勢の奉公人や客のことでもあり、半日でヘトヘトに疲つかれて、夕刻かけてはもうお義理だけの見張りになってしまったのも無理のないことです。

平次と八五郎は、そんな情勢を知らぬ顔に、日が暮れてからフ
ラリとやってきました。

「銭形の兄哥、大層ゆっくりだね」

三輪の万七は少しばかり中つ腹でした。

「泥棒はどうせ日が暮れてからだ。ね、そんなものじゃありませんか、三輪の親分」

ガラッ八は挑戦ちようせんてき的です。

「馬鹿野郎、余計な事をいうな」

平次はそれをたしなめました。

それから二刻あまり、重大な謎をはらんだまま、江戸の夜は静かに更け渡ります。

やがて亥刻半よっ（十一時）とも思う頃、母屋おもやの方からドツと声が
挙りました。

「親分、大変ッ。熊五郎が何処なんどからか出て納戸へ隠れましたよ。
あの腕利きだからうっかり飛込めねえ、早く来て下さい」

八五郎は息せき切って居ります。

「よしよし騒ぐな、納戸の戸はどうした」

「内から締しめて開けさせません」

「それじゃ、三輪の兄哥、母屋へ行って見るか」

「よかろう」

三輪の万七は清吉といっしよに母屋へ飛んで行きます。

「八、お前はここで頑張がんばってくれ」

「へエ——？」

八五郎は少し不平そうでした。

「それから土蔵の扉を八文字に開けるんだ」

銭形平次は大変なことをいい出します。

「大丈夫ですか」

「そして、土蔵から一番先に出て来た奴を縛るんだ」

「へエ——」

「ぬかるな八、一番先に出たのだよ、逃すな」

平次はそのまま母屋へ飛んで行きました。

取残された八五郎は土蔵の扉を開けて、真っ暗な中と睨めっこをしたまま、不安な心持で遠く母屋の騒ぎを聞いております。

不意に土蔵の中から飛出した者が、

「あッ、待てッ、待て」

八五郎は獵犬りようけんのように飛付いてその肩を押えました。

「八さん、御苦勞様ねエ」

「あッ、お前はお秀じゃないか。何をしていたんだ」

「お手伝いに来たのよ、平常伊勢屋ふだんさんのお世話になっているんですもの、——先刻このお蔵の中へお道具を出しに入っただまま、閉められてしまったじゃありませんか」

お秀はそういういいながらいそいそと母屋の方へ駆けて行くのです。

「あ、待ってくれ、お秀」

呼んでも追付くことはありません。

まもなく母屋から平次も万七も清吉も、番頭手代たちも戻って来ました。

「大縮尻よ、曲者を納戸に封じ込んだつもりで安心してゐるうちに、納戸の格子を二本叩き斬って飛出してしまったのさ」

こう言うのは平次です。

「此方も大笑いでしたよ」

と八五郎。

「土蔵から何んにも飛出さないのか」

平次はせき込みます。

「飛出しましたよ、そいつは思いも寄らない人間なんで、ヘッヘッ」

「何？ 飛出した、そいつを捉^{つか}まえなかったのか」

平次は顔色を変えました。

「だって土蔵からパツと出たのはお秀じゃありませんか、——お手伝いに来て、道具を出しに入ったまま閉められたんですって」
八五郎には何んのこだわりもありません。

「あ、それで解った。来いッ、八」

平次は夜の街を一散に飛びました。呆氣に取られて口を開いたままの万七や清吉を後に残して——。

七

お台所町の路地の入口まで来ると、

「八、お前は外で見張れ、——今度こそ間違ひもなく、第一番に飛出した奴を縛るんだぞ。油断するな」

「お秀坊が泥棒ですか、親分」

「今にわかる」

言い捨てて平次は駒吉お秀父娘おやこの小さい家へ飛込んだのです。だが、そこで平次を迎えたのは、娘お秀がたった一人、行燈あんどんの前に慎ましく坐って、観念し切った姿です。

「駒吉はどうした」

「――」

「親父おやじはどこへ行った」

「知りません、親分」

見上げたお秀の眼はいたいたしくも涙に濡ぬれております。

「お前が帰った時はまだ此処にいた筈だ」

「――」

「隠かくすな、お秀」

「え、皆んな申し上げます。父ととさんは百軒目の大願成就たいがんじょうじゆの日だから銭形の親分の鼻をあかせるんだといって、つまらない手紙なんか出したので、私は一生懸命父さんをお願いして、代って行きました。氣ばかり強くたってあの身体で、銭形の親分さんに狙ねらわれては、助かりようはないと思ったのです。――私は日の暮れる前に店の人のような顔をしてそつとあの土蔵に忍び込みましたが、家で留守るすをする筈だった父さんは、私のことを心配して、後から出かけて行って母屋の方に忍び込んであの騒ぎを始めたのです。その間に私は八さんを騙だましてここまで逃げて来ましたが――」

「それで、父親はどうした」

「親分、私を縛って下さい、私が熊井熊五郎です。お願い――親分」

お秀は自分の手を後ろに廻して崩折くずおれるのでした。

×

×

仕立屋駒吉こと、兇族熊井熊五郎は、まもなく東海道筋で捕えられ、江戸に送られて御処刑おしおきになりました。娘お秀は平次の情けに護られて、辛くも縄目を免れましたが、八五郎の心持を無視して、何処へともなく姿を隠してしまったのです。多分有髪うはつの尼で一生をおわるつもりでしょう。

平次が路地の入口に住んでいる駒吉に疑うたがいを向けたのは、自分の動きがあまりによく見張られていることに気が付いたのが最初で、それから茶屋新四郎の手代甚三郎が斬られたのは、右肩先から斜大袈裟ななめおおげさで、振り返り様曲者が斬ったとすれば、刀は左に持っていないければならぬ筈と覚さとったためでした。その上、駒吉を見舞ったとき、間違った振りをして押入を開け、その中には思いも寄らぬ贅沢ぜいたくな品々のほかに、特殊の脇差わきざし、懐提灯ふところちようちん、縄梯子なわばしこ、覆面ふくめん頭巾ずきんなどという忍術使いでなければ必要のない品のあるのを一と眼で見取って、いよいよその信念を固めたのです。これは後でわかった事ですが、駒吉の熊五郎は狙ねらいをつけた大家へ昼のうち紛れ込み、得意の忍術で物の蔭や壁際に屋守やもりのようにへばり付いて、夜更けを待って仕事をするのでした。

三年前伊勢屋へ入った熊五郎が浪人白井某を斬り殺し助勢に行った隣の駒吉の腕を切って逃げたと言われましたが、これは白井某が熊五郎の腕を切り落し、自分は熊五郎に斬られて死んだと見ても差支さしつかえがないわけで、駒吉が熊井熊五郎であることは何んの支障ししょうもなく説明されるのです。

三年間休んだのは、右腕を切られた後の養生と、左腕を自由に

使いこなすまでの練習期間で、それが終わるとふたたび百軒一万両の大願へ驀進したのばくしんでした。

駒吉の熊五郎が一番恐れたのは平次で、平次の家の路地を見張ったのも深い理由のあることです。百軒一万両の仕事は誰と賭けたのか、それを果せばどうなるのかは泥棒世界のことで誰にもわかりません。

お秀は賢かしこく美しいが善良な娘で、極力父の悪業を諫いさめました。が、とうてい及ばず、最後の伊勢屋押込みは、父より一と足先に
出て目的の土蔵の中に忍び込み、父の危険に身を以って代るつもりでした。八五郎の甘さにちよつとは救われながら、とうとう平次の慧眼に見破られたのでした。

「八、くよくよするなよ。お秀は良い娘だったが、熊五郎の娘やお前の相手にはならないぜ」

「お職過ぎますかね、親分」

八五郎はそんな生れて始めての厭味いやみを言って淋しく笑うのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

本作品の初出は底本では「昭和十九年書下し」となっています。

挿絵―萩 柚月

初出―不詳

底本―「錢形平次捕物全集」第八巻 河出書房 昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行 錢形倶楽部